別紙様式３（修士申請者用）

（西暦）2020 年度　博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること）

身体的障害等のある人を対象としたスポーツ教室参加者のスポーツに対する自信と自己効力感の特徴

学位の種類：　修士（看護学）
東京都立大学大学院
人間健康科学研究科　人間健康科学専攻　看護科学域
学修番号：17894602
氏　　名：小川　彰
（指導教員名：斉藤　恵美子　）

注：1 ページあたり 1,000 字程度（英語の場合 300 ワード程度）で、本様式 1～2 ページ（A4 版）程度とする。

本研究は、身体的障害等のある人を対象としたスポーツ教室参加者のスポーツの自信と自己効力感の特徴を明らかにすることを目的とした。都内一事業所で開催されている卓球とボッチャを取り入れたスポーツ教室参加者 23 名を対象に、教室開始前と 5 回目終了後に自記式質問紙調査を実施した。スポーツ教室は、2019 年度は 5 回のコースが 2 クール実施された。2020 年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、9 月から 8 回のコースが 1 クールだけ実施された。調査時点で対象者の種目経験回数を統一するため、8 回コースの 2 回目の調査は、5 回目終了後に実施した。調査項目は年齢、性別、身体（上肢、下肢）の麻痺、転倒歴、スポーツ経験、要介護認定などの基本情報、種目に対する自信、転倒エフィカシー尺度日本版（以下 FES）、一般性セルフエフィカシー尺度（以下 GSES）とした。

分析方法として、属性別の FES と GSES の比較は Mann-Whitney U 検定を用いた。開始前と 5 回目参加後の比較では、スポーツに対する自信について 2 群に区分して McNemar 検定を用いた。FES と GSES は Wilcoxon の符号付順位和検定を用いた。分析には統計ソフト（IBM SPSS Statistics ver. 27）を使用し、有意水準は両側検定で 5%を採用した。さらに、卓球とボッチャに対する自信を 0～100 点で標準化し、レーダーチャートで視覚的に分類した。調査期間は 2019 年 5 月～2020 年 10 月とした。なお、本研究は 2018 年度首都大学東京（現東京都立大学）荒川キャンパス研究安全倫理委員会の承認を得て実施した。

参加者 23 名中、分析対象者は 12 名とした。性別は男性が 4 名、年齢は 40 歳から 80 歳以上であった。開始前の FES 平均点は 27.9 点、GSES 平均点は 48.4 点であった。開始前の FES 得点は、身体の麻痺（下肢）なし（p=.041）、要介護認定なし（p=.030）が有意に高く、GSES 得点では、身体の麻痺（下肢）なし（p=.041）、スポーツ経験あり（p=.018）、ボッチャ経験あり（p=.030）、水中運動経験あり（p=.018）、介助者の同伴なし（p=.030）が有意に高かった。開始前と 5 回目参加後の比較では、ともに有意差はみられなかった。スポーツに対する自信については開始前と 5 回目終了後で有意差はみられなかったが、「自信あり」の人数が卓球は 3 名から 5 名に、ボッチャは 1 名が 3 名に、それぞれ増加していた。開始前と 5 回目参加後を比較したレーダーチャートについては類似性を検討し、3 グループに分類した。ボッチャのみ、またはボッチャと卓球ともに自信が上昇したグループは、スポーツ経験なしの場合や開始前に自信がなかった対象が多かったこと、ボッチャのみ自信が上昇したグループは、身体の麻痺ありの人が多かったことが特徴として示された。

これらの結果から、身体的障害等がある人が複数種目を体験できるスポーツ教室に参加することで、スポーツに自信を持つ機会となることが示唆された。